

# 日蓮宗のビハーラ活動―その理念と意義―

(日蓮宗現代宗教研究所嘱託)

奥田正叡

はじめに

近年医療技術が発達し多くの病気が治療可能となり、他方では高度の人工操作により生死への介入が可能となり、生命倫理重視の世論が高まってきた。そのような流れを背景に、延命の為の医療もさることながら生命の質を重視する医療の大切さが求められ、人間の尊厳を見直そうとする運動が起こった。その一つがいわゆるイギリスに端を發したホスピス運動であり、それは人間が最後の時間まで人間らしく生きられるよう医療にケアの心を取り戻す運動だった。

一九七〇年代今日の日本を代表するホスピスが相次いで開設された。一つは静岡県聖隷三方原病院のホスピスであり、今一つは大阪の淀川キリスト教病院のホスピスであり、ともにキリスト教を背景としていた。一九九二年千葉県柏市に緩和ケア病棟を持つ、国立がんセンター東病院が開設され、次第に、より日本的なホスピスの在り方が問われ、仏教者も積極的に医療現場に参加し始めた。その先駆をなしたのは一九八四年に発足した超宗派の団体、京都仏教青年会（現薄伽梵KYOTO）の活動であり、宗派としては浄土真宗本願寺派（西本願寺）のビハーラ活動だった。その後全国の仏教者が様々な形で医療への関わりを見せ、一九九〇年代には仏教によるターミナルケア施設「ビハーラ」を併設したビハーラ花の里病院や長岡西病院が相次いで開設された。

ビハーラ活動とは、医療や福祉や地域社会と連携のもとに、寺院に於いて自宅に於いてあるいは病氣や障害、高齢化に悩む人達と苦しみを共有し、精神的身体的な苦痛を取りのぞき、安心が得られるよう支援する活動の事である。もともとこのビハーラ活動の精神は釈尊の時代から仏道修行の一つとして位置づけられ、僧医、看病僧などにより実践されてきた。我国においても、江戸時代初期までは僧侶によるビハーラ活動が多く見られたが、その後仏教と医療との分化や寺院形態の変化、西洋医学の流入などにより次第に減少していった。本稿ではかつて活発になされていた我が国におけるビハーラ活動の歴史を学び、日蓮宗におけるビハーラ活動の理念と意義について試論を述べる。

## 1 ホスピスとビハーラ

ホスピスとは、もともと中世キリスト教の聖地巡礼に伴う宿泊施設のことをいったが、その後キリスト教の教えにもとづくターミナルケア（終末期医療）施設としての意味で用いられるようになった。一九六七年、イギリスのシシリソンダースが世界初のホスピス、セントクリストファー病院を開設した。一九七〇年代に入ると今日の日本を代表するホスピスが相次いで開設された。一つは静岡県聖隷三方原病院のホスピスであり、今一つは大阪の淀川キリスト教病院のホスピスである。これらは共にキリスト教を背景としていた。その後、仏教関係者も積極的に医療へのかわりを見せはじめた。当初、仏教関係者の医療へのかわりを「仏教ホスピス」という言葉で表現していたが、仏教の主体性や独自性を求める議論がおき、サンスクリットの仏教語「ビハーラ」が仏教ホスピスに変わる言葉として提唱された。

「ビハーラ」とは、散歩して気晴らしをすること・享樂すること・楽しむこと・静養すること・休養の場所・僧院・寺院・安住・精舎等を意味する言葉である。サンスクリット経典の用例には、「vihara-desa 気晴らしの場所」・

「vihara-bhumi 娯樂地」・「vihara-sukha 樂、樂住」等がある。法華經の用例としては、「sukha-vihara-parivarta 安樂行（『安樂行品第十四』）」・「viharams 精舎（『分別功德品第十七』）」等があげられる。なおビハーラと呼ばれた仏教施設の機能は『十住毘婆沙論』には、「病人への供持、病人への投薬、病人への説法、看病人への給仕、比丘への説法」などと記述されている。

## 2 ビハーラ活動の歴史

多くの仏教經典には、仏陀を医王、法を薬、僧を看病人にたとえ、病人を看護することは仏陀を看護するのと同じ功德があると説かれている。また、病者を看病しない者は自分も看病を受けられないと説かれ、積極的に看病の必要性が説かれている。

たとえば『梵網經』には「看病は八福田の第一」と説かれ、『大般涅槃經』（卷第十一 現病品）には病人食の作り方が具体的に説かれている。『摩訶僧祇律』（卷第四）には薬、看護、食事の調和があつて始めて病が治癒すると説かれ、食前のうがいや手洗いなどについて詳しく説かれている。また『四分律』（卷第十四）には食べて良いもの、悪い物、食事の取り合わせや摂取量などの食事の知識、水分の摂取量や薬の適応量など薬の正しい知識、看病の心がけが説かれ、利益のための看病を堅く戒めている。さらに仏の教えを誰にでも解るように説き、説法を以て病人を法悦に入らしめることなど、具体的に説かれている。

古代印度の祇園精舎には、聖人病院や仏示病院があり、アシヨカ王は当初から医療活動を実践していた。中国でも北魏の孝文帝が洛陽に慈善病院別坊を開設したり、唐代には、扶養者のいない病人や老人、身体障害者や孤児などを収容した非田養病坊が寺院に設けられた。

日本では飛鳥時代の五三八年、百濟から仏教が伝来し、同時に多くの先進文化が伝えられた。五五四年医学博士有  
凌陀と採薬師丁有陀が百濟より渡来し、医学を伝えた。五九〇年には日本初の僧侶善信尼が百濟留学から帰国し、仏  
教と医学をもたらした。僧侶たちの多くは、仏教の教えを説きながら慈悲の精神により救療活動を行った。

聖徳太子（五七四～六二二年）は「世間虚仮 唯仏是真」の言葉が示すように熱心な仏教者だった。そして大阪に  
日本初の仏教寺院である四天王寺を建立し、その中に四箇院を併設した。四箇院とは施薬院（貧しい病者に薬剤を与  
えた所）、療病院（身寄りのない病人を収容し法を説いた所）、悲田院（貧しい孤独な人を収容した所）、敬田院  
（人々の精神的救済を行った所）の四つの建物のことをいう。つまり「寺院、薬局、病院、福祉施設の一体化」が日  
本における寺院形態の原型だったのである。

奈良時代になると、国の事業の大部分が仏教的色彩を帯びるようになり、国毎に国分寺・国分尼寺が建てられた。  
六八〇年の天武天皇の勅命には、寺院と病院が合体すべしという条項があり、寺院の多くに施薬院や療病院が設けら  
れるようになった。寺院は、さながら救療事業のセンター的役割を果たすようになっていった。また行基のように病  
人の看護を主とする看病僧、鑑真のように僧でありながら医を職とする僧医なども出現した。行基（六六八～七四九  
年）は、橋、池、溝などの灌漑事業を行いながら、労働者の救済所として布施屋や悲田院を建てた。鑑真は（六八八  
～七六三年）、七五四年東大寺に戒壇を建て、日本に初めて戒律を伝え、同時に薬の名称と効用を鼻で嗅ぎ分ける  
「鑑真方」を会得し、医療に貢献した。

平安時代前期は、世の中が平穏無事で文化も栄えた。この時代の仏教は、最澄（七六七～八二二）は医方や陰陽に詳しく、信濃に広濟  
院と広極院を建て行客の難に備えた。空海（七七四～八三五）は荒れ地を開拓し、讃岐に万農池を修築し、民衆のた  
めの医療を施した。淳和皇太后（八一〇～八七九）は京都の嵯峨離宮を大覚寺と改め、一般病舎の済治院とハンセン

病看者施設の不壞化身院を設けた。この時代、密教は祈祷や呪いを取り入れ、病気になるると医学的治療は後まわしにしてまず祈祷を受けさせるようになり、そのことが医学の発展を抑えることにもつながった。

平安時代末期になると仏教の退廃的兆が見えはじめ、仏教看護の崇高な精神も薄れ、報酬のみを目的とする僧侶も出てきた。この頃天然痘・疫痢・肺結核など伝染病が流行り、迷信的な加持祈祷では治らず、結局医学は仏教と分離する方向へ進んだ。また、現世利益を説く密教は人心から離れ、末法到来の思想が深く民衆に浸透した。その結果、現世の利益よりも未来の浄土を求める極楽往生安楽国の信仰が興り、浄土思想が流行するに至った。

鎌倉時代に入ると浄土宗の流行以来、戒律を軽視し修行を怠る仏教界の現状に失望した人々は律宗に注目し、もう一度戒律の実践によって規律ある仏教界を再興しようとした。それを契機に、禅宗や法華宗など鎌倉新仏教各宗派が次々と誕生した。

鎌倉時代の文化はほとんど仏教者によって支配され、医学も大部分は僧侶が掌握した。この時代、公の医療制度は特に規定されなかったが、それにもかかわらず、民間看護史上黄金時代といわれるほど多くの医療施設や看護事業が僧侶達によって実践された。源信（九四二―一〇一七）は『往生要集』を著し、念仏一門による往生極楽を説いた。

横川の首楞嚴院では、往生要集の実践として学僧たちが臨終の看取りをした。これは、日本仏教によるターミナルケアの原形といえる。重源（一一二一―一二〇六）は功德湯などの湯屋を造り病人を湯治させ、法然（一一三三―一二一二）は『往生要集』に深い感動を受け、救済を求める民衆に専修念仏の教えを説いた。栄西（一一四一―一二五一）は『喫茶養生記』を著し、漢方薬として使われていた茶の医学的効用を説き、良忠（一一九九―一二八七）は『看病用心鈔』を著し仏教的看護のあり方を説いた。良忠は臨終に際した病人をどうしたら死後の世界に生まれ変わらせることができるか、そのためにはどのような条件の下に重病人に接したら良いかを浄土宗の立場から説いた。現在のベッドサイドケアの原形である。叡尊（一二〇一―一二九〇）は、五十余年間救療活動した功績により伏見天皇

から興正菩薩の称号を授けられ、忍性（一二一七―一三〇三）は奈良にハンセン病患者の收容所「北山十八間戸」を開き、さらに鎌倉に極楽寺を建て、寺域に桑谷療病所を開き、二十年間に五万人以上收容した。日蓮（一二二二―一二八二）は病苦の弟子や信徒に対し、法華信仰の立場から励ましの言葉や手紙を書き残している。現存する日蓮の多くの書簡から理解することができる。梶原性全（一二六五―一三三七）は、鎌倉時代最高の医書医学全書と評価される『頓医抄』や『万安方』を著している。

南北朝から室町桃山時代の特色は、戦傷治療の発達と医術諸流派の成立及び看護精神の変化である。室町時代は戦争が各地で頻繁に行われた。それに伴い武器も進歩し負傷の程度も大きくなっていった。武士の中からこれらの治療に特殊技能を持つ者が現れ、この軍医を「金創医」と呼んだ。室町末期には、金瘡（創傷外科）、女科（産婦人科）、児科（小児科）、眼科、口中科（口腔外科、歯科）などの専門医が現れるようになった。この時代末期、曲直瀬道三（一五〇七―一五九五）が出て『啓迪集』八巻を著した。この書は医学を仏教から独立させるきっかけをつくり、我が国における近代医学のはじめを飾った。

江戸時代になると、幕府の政策により檀家制度が用いられるようになった。その結果寺院の経済が安定し、僧侶の伝道活動が以前より弱くなり、それに伴って僧侶の看護活動も、一部を除いては全体的に衰退していった。この時期、医学が学問として初めて独立するに及んで、ますます拍車がかかった。曲直瀬道三は日本最古の私立医科大学となった学舎啓迪院を開設し、八〇〇余名の門下生を育てた。結局、幕末までこの派の門下生がわが国医学の主流を占めていった。

明治時代になると維新と同時に西洋医学が流入し、我国医療の主流となります。ますます仏教と医療が分離していった。

### 3 日蓮宗ビハーラ活動の理念

日蓮宗のビハーク活動は、具体的には法華経安樂行品に説かれる四安樂行をはじめ六波羅蜜、四摂法、四無量心の実践であり、すべての人がお題目に触れ仏になることを願い導く修行と考えられる。

①法華経安樂行品に説かれる四安樂行安樂行品では初心の菩薩が悪世において如何にして法華経を説くかを四安樂行の修行として説いている。

身安樂行 ↓ 修行の妨げになるものに近づかず、常に心を禅定に保つ  
口安樂行 ↓ 経典や他者の悪口を言わず、求めに応じて法華経を説く  
意安樂行 ↓ 大慈悲心をおこして、一切衆生を平等に救済する心を持つ  
誓願安樂行 ↓ 衆生救済を誓願する

ここで注目したいのは、口安樂行についてである。法華経には、次のように説かれている。

「菩薩は常に安穩ならしめんことを樂つて法を説け。・・若し比丘及び比丘尼と諸の優婆塞及び優婆夷と国王、王子、群臣、士民とあらば、微妙の義をもって和顔にしてために説け・・。懶惰の意と懈怠の想とを除き、諸の憂惱を離れて慈心をもって法を説け。昼夜に常に無上道の教を説き、諸の因縁と無量の譬喩とをもって衆生に開示して、ことごとく歡喜せしめよ。但一心に説法の因縁をもって、願わくは仏道を成じて衆をして亦爾ならしめんとのみ念ぜよ。これ則ち、大利ある安樂の供養なり・・。」（『安樂行品第十四』）

②六波羅蜜（『序品第一・化城喻品第七・提婆達多品第十二・常不輕菩薩品第二十』）

六波羅蜜は六度ともいい、覚りの彼岸に達するための六つの方法のことである。

布施 ↓ ものを施したり真理を説き与え、安心を与えること  
持戒 ↓ 戒律を守り、常に自己反省をすること  
忍辱 ↓ 法難、迫害に耐え忍ぶこと

精進 ↓ 布施、持戒、忍辱、禪定、智慧を常に実践すること

禪定 ↓ 心を安定させること

智慧 ↓ 仏の真実の教えを学び、それを表すこと

六波羅蜜の中でビハール活動の中心になるのは、布施である。布施行とは、他者に対して物的な提供や精神的な救済をすることである。内容的には、財施・法施・無財施の三種類がある。

大事なことは、布施はあくまで自己への執着から離れるための修行であるということである。

財施 ↓ 金品の提供、生活必需品の提供、公共事業的活動等

法施 ↓ 真理や正しい知識智慧を他者に提供する、仏教者の正法弘通のこと

無畏施 ↓ 他者が日常生活のさまざまな恐怖から離れられるよう、働きかけること

また、布施を受ける対象に関する考え方が「福田思想」である。福田とは、「田がよくものを産するようにこれを施せばよく福を産す」という意味である。つまり、これに施すことにより福德・功德を産むとされる対象を田地にたとえて、

福田と言ったのである。三福田には、悲田として福祉的布施対象（社会的病的弱者）、七福田には常施医薬療救衆病（医薬提供）、八福田には給事病人（病人への給仕）などが説かれている。

### ③四摂法（『提婆達多品第十二』他）

四摂法とは菩薩が衆生の心を引きつけて親愛の心を起こさせ、最後には仏道に導き入れるための行為のことである。

布施 ↓ 良いものや良いこと正しい教えを施すこと、自分の力を分け与えること

愛語 ↓ 優しい言葉心とむ言葉を他者にかけること

利行 ↓ 人のためにつくすこと

同事 ↓ 苦樂を共有すること、他者と同一立場におくこと

④ 四無量心

四無量心とは、禪定によって得る四つの功德心のことである。

慈無量心 ↓ 人に樂しみと安らぎを与えようと願う心

(どのようにしたら安らぎの心を与えられるか)

悲無量心 ↓ 人の苦しみや悲しみを取り除こうと願う心

(どのようにしたら苦しみを取り除くことができるか)

喜無量心 ↓ 人の樂しみや喜びを共に喜ぶ心

(どのようにしたら喜びの心に導くことができるか)

捨無量心 ↓ 好き嫌いによって人を差別しない心

(どのようにしたら平等に救済できるか)

⑤ 弘經の三軌(『法師品第十』)

弘經の三軌とは、衣座室の三軌ともいい、法華經流布の心構えのことである。

衣 ↓ 柔和忍辱

座 ↓ 一切法空

室 ↓ 大慈悲心

法師品第十には、次のように説かれている。

「若し善男子善女人ありて如来の滅後に四衆のためにこの法華經を説かんと欲せば、如何が応に説くべきや。この善男子善女人は如来の室に入り、如来の衣を着、如来の座に坐して、而してすなわち応に四衆のために広くこの教を

説くべし。如来の室とは、一切衆生の中の大慈悲心これなり。如来の衣とは、柔和忍辱の心これなり。如来の座とは、一切法の空これなり。この中に安住して然して後に、怠ならざる心をもって諸の菩薩及び四衆のために広くこの法華経を説くべし・・・」

⑥良医治子の譬え（『如来寿量品第十六』）

日蓮聖人は、失心の子供を末法の衆生、良薬を妙法五字、使者を本化地湧の菩薩と解釈し、自らを仏の勅命を受けて末法濁悪の時代に衆生救済にあたる本化地湧の菩薩として自覚された。

如来寿量品第十六には、次のように説かれている。

「譬えば、良医の智慧聡達にして、明かに方薬に練じ、善く衆病を治す」

（『譬如良医 智慧聡達 明練方薬 善治衆病』）

「是の好き良薬を今、留めて此に在く。汝取つて服すべし。差えざらんことを憂うることを勿れ」

（『是好良薬 今留在此 汝可取服 勿憂不差』）

⑦仏性礼拝と常不軽菩薩（『常不軽菩薩品第二十』）

常不軽菩薩の但行礼拝の修行は积尊前世の修行の姿であり、日蓮聖人も、法華経の修行の肝心は不軽品であると述べられている。

「我深く汝等を敬う、敢えて軽慢せず。所以は何ん。汝等皆菩薩の道を行じて、当に作仏することを得べし」

（『我深敬汝等 不敢輕慢 所以者何 汝等皆行菩薩道 當得作仏』）

・ 仏性の礼拝↓人は、誰もが仏である。

・ 人間の尊重と平等観↓人は、誰もが等しく仏性を備え平等に尊い。

⑧地涌の菩薩の自覚と代受苦の精神

日蓮聖人は、一切衆生の苦しみは日蓮の苦しみであるという代受苦の精神で法華経弘通を自覚された。『祈祷抄』の「諸仏菩薩は本より大悲代受苦の誓い深し」、『諫曉八幡抄』の「一切衆生の同一の苦は悉くこれ日蓮一人の苦と申すべし」等の言葉はそのことをよく表している。

#### 4 病院・高齢者施設での法話について

最近病院・高齢者施設から僧侶への法話要請が増えている。特に老人福祉施設では、介助・カウンセリングと同様に、法話が多く実践されている。ここでは特に教義面ではなく、法話を行う場合の心がけについて述べてみたい。法話を行う場合、いろいろな型が考えられる。普通は、部屋、ロビーの前中央に講師が演台を前にして立ち、聴衆がその前に並ぶ型が多い。従来の法話会型式だが、このような法話会では次の点に注意したい。

#### 病院法話について

##### ①法話会を布教の場と考えていないか

病院・老人ホームなどの法話は、布教伝道が目的ではない。仏教者・法華経信仰者として、釈尊・日蓮聖人の教えや自分の信念を伝える以上、結果的には布教伝道となるが、教義の宣伝のための法話、特に自己の信念を良しとし、他を悪しとするような押しつけ的な法話では、聴く人に安らぎは与えられない。教えを説くというより、「心の看護」に徹する姿勢が大事といえよう。

##### ②話し手、聞き手が二分化されていないか

私、話す人、あなた聴く人、と二分化されていないか。法話は、聴く人が自分のこととして聴いてくれることが大切である。話を他人事として聴くようでは、話し手の一人舞台になってしまう。聴く立場になって話すことが重要であろう。

③御利益を授けてやる、という気持ちで話していないか

上から下へ御利益を授けるような話し方は、相手に伝わりにくい。特に病人や老人は、自分のことを理解してもらうことによつてはじめて共感を持つ。現世利益的な話は避けたい。

④専門用語を使い過ぎていないか。

仏教的専門用語はなるべく避け、平易で分かりやすい言葉を使う。患者・老人が多いので、疲れさせない話し方を工夫したい。高尚な内容にこだわらない方が良い。

⑤会場が明るく和やかな雰囲気になっているか

肩に力が入り過ぎ、説得するような話は好まれない。話す人の心、願いを自然に伝えたい。和やかな雰囲気が大切である。

### 病院法話の心掛け

①聴く人がいてこそ法話が成り立つ

どんな立派な布道家でも、話を聴いてくれる相手がいなくては法話にならない。つまり、相手の存在が自分を成り立たせてくれる。聴く人の視線や表情の中に、語る自分の法味が初めて確認できるのである。相手のために私が何とかしなければならぬ、という気負いはマイナスにつながる。話し手と聞き手が同一立場である、という気持ち

ちで法話に取り組みたい。

## ② 背伸びしない

初めから盛りだくさんなことはせず、病院、施設の方針に沿って自分の対応能力を十分考え、余裕あるスケジュールで始めたい。時間的距離的に無理があれば、長続きしない。法話内容においても、好感を持たれたいばかりに大きな表現をしたり、不用意な約束をしないことが大切である。宗教家として信頼されている以上、話し手の何気ないしぐさや一言が、相手には大きな意味を持つ。背伸びした話は避けたい。話し終えた後、常に不満足感が残るが、その方が良い場合が多い。満足感の強い法話は結果的に自己満足に終わり、返って相手に伝わっていないことがある。無理は禁物である。

## ③ 対機説法

法話の特色は、対機説法といわれる。応病与薬のように、相手に最も適した話をする事である。患者や老人は、心の安らぎを求めている。教義教学に偏らないように心がけたい。まず相手を知る事が基本である。どの種の病院、患者なのか、どんな内容の老人ホームなのか、法話する施設の性格や特色、入院入居者の状況を知っておく必要がある。また、法話する会場の広さ、マイクの有無など会場の設備を事前に知っておくと、リラックスして法話に臨める。

## 病院法話の実例

ここで、私が現在行っている薄伽梵 Kyoto の病院、老人ホームでの法話会を紹介したい。あくまでも参考例であり、実践に当たってはそれぞれの施設に一番適した法話会を作りあげてほしい。

※薄伽梵 Kiyoto は、昭和五九年に結成された京都仏教青年会を前身とする超宗派の仏教団体で、一六宗派一九名の僧侶により組織され、病院・老人ホーム等での法話活動、書道教室、月例研究会などの実践活動を行う。法衣で病院法話を始めた先駆者である。

### ①病院（高雄病院）

#### プログラムー勤行自己紹介歌法話

※高雄病院は京都市北西部にある病床一三三床、内科、呼吸器科、東洋医学科の診療科目を持つ病院で、入院患者の三分の二は六五才以上の老人、慢性疾患や成人病患者が多い。

法話会場は三階会議室。正面に厨子入釈尊木像を安置し、香華を供える。法話会場らしく荘厳されている。最初に勤行が五分ほどある。講師の宗派独自の勤行を行う。次に自己紹介。宗派や出身地、住居などを話す事で、聞く側は自分との共通点を見いだしていく。住まいや趣味が一致すると、親近感が生まれる。次に一緒に歌う。特に童謡が多い。歌詞はプリントして渡している。歌う事により、身体も気分もリラックスしてくる。法話時間は三〇分。この病院では入院患者だけでなく、家族や医師、看護婦などの病院スタッフが同席する事が多い。自分の思うところ、考えをはっきり伝えられるよう整理しておく必要がある。特に仏教者として何を拠り所にしてるか、それが今の生き方にどうかかわっているかを伝えられるようにしたい。

「経典にはこう書いてある。仏教の歴史はこうである。」ということは読書でことたりる事であり、私にとつてのお釈迦様、日蓮聖人、父母を想うなど、具体的な内容の方が説得力がある。法話の後、質問時間を取っている。法話より質問の方が盛り上がる事がある。いろいろな質問が出るので、参加したスタッフ全員で答えるようにしている。解らない事は解らないとして、無理してその場で答えを出す必要はない。次の課題としておけば良い。

病院が宗教的法話を求めるという事は、治らない病気をどう受け止めていくかという患者の心の問題の解消、特に

全人格的な医療のあり方を模索している証であり、宗教家に大きな期待が寄せられている。病院法話の特徴は、この期待に込めていこうという責任感と気負いなき法話という二律背反の難しさであろう。

布教の大家でも、病院や老人ホームでの法話は勝手が違うのでごめん被ると尻込みするという。寺院や檀信徒の前で生老病死を説きながらも結局のところは、病いや老いを自らのものとしていないのではないだろうか。ここ一五年間ほど、薄伽梵Bhagavatoの一員として病院や老人ホームで法話会を続け、その難しさを痛感している。本当に患者や老人の身に成り切ることは困難なことだが、苦しみは分かち合えるという気持ちで活動してきた。法話は寺院や信徒という限定された場所や対象によつてのみなされるというイメージが強かったが、本当はそうではなく、そうあつてはならないと思う。日蓮聖人の教えは、娑婆即寂光土という現実生活の重視と、即身成仏という我が身の救いにある。日常生活や我が身の苦楽の他にどこに救いがあるのだろうか。日蓮聖人の教えを拠り所としている私たちが、今こそ広い視野に立つて社会のニーズに込めていくべき時ではないだろうか。

## 日蓮宗のビハーラ活動の意義

